香川短期大学紀要　第41巻，13～24（2013）

保育学における乳幼児の生物学的特殊性に対する認識の構造

―ポルトマンの「生理的早産説」をめぐる「人間性」に対する解釈に着目して―

吉　田　直　哉

はじめに[1)]

現在の保育学研究において，保育学というパラダイムが持つ「子ども観」についての自覚的な反省はほとんど行われていない[2)]。それは，学的システムとしての保育学において，対象，方法，研究者共同体という科学の三つの成立要件のうち，「対象」が確定されていないということを意味する。このような事態が生起するのは，つねに／すでに眼前に存在する子どもの事実性の前に，そのような反省的問いが発せられる余地を，保育現場が持たないためなのだろうか。それとも，保育現場が，そのような保育者としての存在論的な問いに関わるような深刻な反省を提出しているにも関わらず，保育学が，そのような問いを整序しうるような語彙を磨き上げてこなかったためなのであろうか。

本稿の初発的な関心は，今日の保育士養成課程において，未来の保育者たらんと志す学生たちに説き広められている「子ども観」とは，如何なるものなのか，という極めてナイーヴな疑問に由来している。そのような関心領域のうち，本稿におけるわれわれの探究は，子どもの持つ「動物性」と「人間性」は，いかに定義され，語られているのか，そして，そのような語り方は，どのような論理的帰結を生じさせるのかという二点に，焦点を絞ってゆくことになるだろう。

以上のような問題関心から発し進められていく本稿の探究の目的は，以下の３つである。第一に，近年に出版された，保育者を目指す学生を主たる読者として想定していると思われる保育原理，保育学入門に関するテキストの中において，幼児のもつ「人間性」がどのように記述されているのかを分析することである。第二に，現状の「人間性」に関する記述に共有されている論理構造を明らかにし，その限界を指摘することである。第三に，そのような「人間性」記述の限界を，現在の社会状況を踏まえて乗り越えていくための枠組みの転換に関する提案を行うことである。

以上によって，本稿は，パラダイムとしての保育学のディスクールが持つ，乳幼児における「人間の条件」，「人間性」の写像を縁どりたい。保育は，人間に働きかける営みとして，近代において登場した営みである。その保育についての自己言及的な言説の蓄積であるところの保育学は，必然的に，人間学として成立することになる（稲井；吉田［2013］）。「人間学としての保育学」は，どのようなコードに基づいて構築されているのか，本稿の問題関心は，最終的には，パラダイムとしての保育学が，現在依拠している不可視の前提を摘出するというところにまで射程を拡大してゆくことになるだろう。

第１章　既存の保育原理テキストにおける「人間性」記述の実際

先に述べたように，本稿は，保育原理のテキストにおける人間性記述の構造を明らかにすることを目指すものである。とはいえ，保育原理全体の人間性記述を全て抜粋することは，紙幅の関係もあり不可能である。そこで，本稿では，保育原理のテキストの中で，スイスの動物学者アドルフ・ポルトマンに

平成25年１月４日受理
連絡先　〒769－0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地
香川短期大学　子ども学科
TEL　0877(49)8059　FAX　0877(49)5252

関する記述に注目し，ポルトマンがどのような意味づけを与えられて取り上げられているのかを明らかにしていく。というのも，人口に膾炙した感のあるポルトマンについての記述には，筆者の人間性に対する思想が端的に表現されるからである。

まず，本章では，分析対象として，1980年以降に発行された保育原理のテキストのうち，ポルトマンについて言及のあるものを取り上げる。

まず，保育学関連の総合的な辞典から，「生理的早産」の基本的な解釈を引いておこう。村上貞雄監修『幼児保育学辞典』(明治図書出版，1980年）には，きわめて抑制的な，以下のような記述がある（文責は村山貞雄)。

> 人間を他の動物と比較するとき生理的に早産であるという学説。スイスの動物学者，バーゼル大学教授ポルトマン（Adolphe Portmann, 1897～）は，鳥類，哺乳類，人類の研究を行い，とくに動物界における人間の位置について考察し，人間は母の胎内に10か月いて生まれるが，これは他の動物と比較したとき，身体の組織や機能の面からみて，なんらかの原因で一年ほど早産したことになると主張して一般に認められた。この考えから，早く人間の手に届くところに出てきた乳児に対してなんらかの教育を行なうべきではないかという主張がある。

ここでは，ポルトマンは，さまざまな動物種との比較によって人間を考察した結果，他の動物に比べて，人間は１年早産すると主張した人物として紹介されている。そして，この早産説は，乳児に対する「なんらかの教育を行なうべき」という主張の根拠となっていると紹介されている。以上のように，保育学の辞典においては，ポルトマンの生理的早産説は，(1) 動物と比較したときの人間の新生児の未熟さを主張し，(2) その未熟さが，「乳児」に対する「教育」の必要性を唱える根拠になっているという紹介のされ方をしている。

それでは，次に，保育原理のテキストにおけるポルトマンの記述を見ていこう。村山貞雄；岡田正章編著『保育原理』（学文社，1984年）においては，第４章「保育の場」の「３．保育所」において，ポルトマンに関する記述が見られる（文責は雨森探丹生)。そこでは，「「人間は生理的早産児として生まれる」と，人間を規定したのはポルトマン（Portmann, A.）であるが，このポルトマンの言葉の１つの側面は，人間の子どもはおとなの援助がなければ，一人では生命の維持さえ難しい状態であることをあらわしている」と述べられた後で，「したがって，乳幼児は養護される存在」であるとしている（村山；岡田編［1984:59]）。「しかし」と雨森は即座に繋ぎ，「乳幼児はたんに生活を保障され，養護されるだけの存在でもない」と切り返す。「前述したポルトマンの言葉のもつもう１つの側面を見逃してはならない。すなわち，生理的早産児であることは，育つ可能性を内在させていることを示している」。しかしながら，そのような「成長発達の力」は，「ただ放っておかれる」だけでは「顕在化し得ない」。そこには，「成長発達の契機」が必要なのであり，それは「よりよい環境とのかかわり」で実現される。「よりよい環境（人的・物的環境）とのかかわりのなかで，乳幼児は人間としての成長発達が促される」。そして，この環境に着目する点が，「ポルトマンの言葉のもつもう１つの側面」だと述べられる。「その意味で，乳幼児は教育を保障される権利を基本的人権として保障してるわけであり，その権利を保障することが大切」だとされるのである（村山；岡田編［1984：60]）。

ここでは直接的に，「生理的早産」と「成長可能性」，「保育の意義」が，きわめて一貫した論理で連結されていると言えるだろう。そして，このような論述の仕方は，他のテキストにも，微妙な差異を伴いつつも共有されているのである。以下，その記述を見ていこう。

林信二郎；岡崎友典『幼児の教育と保育：指導することと見守ること』（放送大学教育振興会，2004年）では，「２　幼児期の発達的特徴と保育」においてポルトマンに関する記述がなされている（文責は林信二郎)。そこでは，「ポルトマン（Portmann, A.）は，人間の出産は早産が慢性化したものであるとして，「生理的早産説」を唱えている。それほどに人間は未成熟で生まれてくることが，そのことがその後の学習の可能性の大きさをもたらせてもいる」と記述され，人間の「未成熟」が，「学習の可

能性の大きさ」の前提的要因であるとされている（林；岡崎［2004：25］）。ここでもまた，「生理的早産」が「未成熟」であることと同値と見なされ，その「未成熟」さが，人間の子どもの持つ「学習の可能性」の大きさをもたらしているという，先ほどと同型の論理が展開されている。

待井和江編『保育原理　第３版：現代の保育学４』（ミネルヴァ書房，1991年）では，このような「人間の新生児に特有の未熟さ」が，「文化」を内在化する可能性をひらいていると述べられる（文責・泉千勢）。本書では，ポルトマンの「１年間生理的早産」説に触れて，「人間の子どもは他の動物は違い，感覚器官や運動器官が未熟な状態で生れてくる。そして，それら諸器官が，その生活の中で，大脳の発達を介して発達していくという特殊な存在であること，そのことが，有機体としての発達の過程に文化を取り入れる可能性を生み出し，その文化取り入れのあり方が，発達段階に反映するということになるのである」と述べている（待井編［1991：136］）。

同書の改訂版である，待井和江編『保育原理　第７版：現代の保育学４』（ミネルヴァ書房，2010年）においても，基本的には上記の論旨は踏襲されている（文責は戸江茂博）。本書では，「生理的早産」に触れて，この時期を「人間は養育者に依存しなければ生きていけないこと（養育者との関係が人間の発達に重大な影響を与えること），胎児のような状態で人工的環境すなわち文化的世界に出会うので，保育・教育されなければ人として存在できないこと，さらに，幼少期の人間には直立歩行，言語，考える力など，人間としての基本的な特質を獲得していくための豊かな可能性があること」を示すものとして位置づけ，それによって，「人間と保育・教育との密接で不可分の関係が改めて明らかにされた」とされている（待井編［2010：39f.］）

待井和江・泉千勢編著『新訂　保育原理』（東京書籍，1994年）では，泉千勢によって，以下のようにポルトマンが紹介されている。

> ポルトマン（A. Portmann）は，その秘密が誕生時の姿に隠されているのではないかと想定して，ほかの動物と人間の「子どもの出生」の状況を比較した。そして「人間は１年間生理的に早産している」のだと考えた。［…］つまり，人間の子どもの特徴は，感覚器官や運動器官（外の世界と接触交流する際の手段）の機能的成熟が，胎外で子どもを取り巻く環境からの諸刺激（人間の生活文化）の影響を受けて方向づけられながら生じてくるというところにある。何を見分け何を聞き分けるのか，また物を扱う手指の器用さ等も生後の生活文化とのかかわりの中で形成されていく。それゆえ人間の子どもの誕生時の未熟さは「発達の可能性」の大きさを意味しているといえる。それは，ほかの動物には見られない，人間という種の特殊性を示している。（待井；泉編［1994：93f.］）

ここでは，人間の新生児は，その「未熟さ」によって，「環境」にひらかれており，それが「発達の可能性」を保障しているという論理が展開されている。このような論旨は，同著者による待井和江・泉千勢編著『保育原理：幼児教育科・保育科・保育士養成課程用』（東京書籍，2005年）におけるポルトマンの記述にも共有されている。そこでは，「どういうわけか，人間の子どもは早産の状態で生まれてくる」ということが，「感覚器官や運動器官（外の世界との接触交流する際の手段）の機能的成熟が，胎外で子どもを取り巻く環境からの諸刺激（人間の生活文化）の影響を受けて方向づけられながら生じてくる」という「人間の子どもの特徴」の前提であるという論旨が展開される（待井；泉編［2005：93f.］）。つまり，「人間の子どもの誕生時の未熟さ」は，すなわち，「「発達の可能性」の大きさを意味している」とされるのである。さらに，この「発達の可能性」の大きさこそが，「人間という種の特殊性」を示すものだと畳みかけられる（待井；泉編［2005：94］）。

諏訪きぬ編著『現代保育学入門』（フレーベル館，2001年）は，ポルトマンに単独の項を充て，ポルトマンの原文を詳細に引用してその学説を紹介している点で異色である。それは，「第９章　先人が保育・教育について考えたこと」の中の「４．早期教育の可能性」にみられる（文責・諏訪義英）。

まず，ポルトマンは，彼の主著『人間はどこまで動物か』において，「他の高等哺乳動物に比べて１

年早く未熟な状態で誕生すること」を，「生理的早産」と名づけたとし，「その意味を考える」ことが大切だと述べる（諏訪編［2001：269］）。この点に関して，筆者の諏訪義英は，「ポルトマンは，「生理的早産」の原因を，人間の存在様式と動物の存在様式との間にある大きな違いに見いだして」いると見る（諏訪編［2001：270］）。その「違い」とは，「動物の行動は，環境に拘束され，本能によって保障されている」のに対して，「人間の行動は，世界に開かれ，そして決断の自由をもつ」（諏訪編［2001：95］）という相違である。「人間の場合」には，動物と異なって，「もっと環境を自由に選択し，それと積極的にかかわり，その環境を変えながら，そこに人間の世界をつくる行動様式」を持っているという。それゆえ，「人間は，この開かれた世界の中で行動する中で，表象の能力，自分自身を対象として捉え，自分自身の生活を指導し，導く力，そして豊かな精神生活を獲得しながら，人間となっていく」。ここで，この文章が「人間は［…］人間となっていく」という，一見したところ，同語反復（トートロジー）になっていることに注意すべきである。つまり，前者の人間は，動物種としての人間であり，後者の人間は，（動物と区別された）人間の独自性という意味での「人間性」を指していることに留意する必要がある。

「人間が人間らしく育つためにこそ，社会的文化的環境の中に未熟な状態で生まれる必要がある，というのがポルトマンの「生理的早産説」」（諏訪編［2001：270］）と諏訪義英は結論付けている。つまり，ここでは，ポルトマンは，「生後１年間の発育にとって重要な社会的文化的な関係を示すことによって，乳幼児期の重要性を示唆」したとされているのである（諏訪編［2001：272］）。

以上において検討された保育原理のテキストでは，ポルトマンの「生理的早産」説は，動物と比較した時の人間の新生児の「未熟さ」を主張したものとみなされ，その未熟さのゆえに，「環境」「文化」にひらかれていると述べられていた。そして，このような，外部への開放性こそが，人間の乳幼児が見せる発達の「可能性の大きさ」を保障しているという主張の論拠として提示されていることが明らかとなった。次章では，ポルトマン評価の論理構造に現れた，保育原理テキスト独特の「人間性」把握が，ポルトマン本来の思想からどのように乖離しているのかを明らかにしていこう。

第２章　「生理的早産」説の再読：ポルトマンの真意

前章では，既存の代表的な保育原理のテキストにおける「人間性」に関する記述の特性を，アドルフ・ポルトマンに関する記述を分析することで，検証することを試みた。そこで明らかになったのは，保育原理における「人間性」の記述が，第一に，人間と動物との間にある生理学的な差異から説き起こされていること，第二に，その人間と動物との差異が，人間の未熟性，あるいは「動物的な能力の欠如」として記述されていること，第三に，そのような，動物としての未熟性，未完成性が，保育という営みの可能性を保障していると記述されていることである。

本章では，そこで参照されていたポルトマンの著書『人間はどこまで動物か』を再読し，前章で引用したようなポルトマン解釈の「歪み」を明らかにしてゆく。実は，本書は，原題が『人間論の生物学的断章』とされているように，基本的には独立した複数の論考を収めた論文集の体裁を採っている。それゆえ，各論考は，まさしく「断章」として，それぞれ完結したものとして，とりあえずは読まれるべきであり，各章の思想を，軽々に（ポルトマンの示唆を超えて）結びつけることは，安易な曲解を招きかねない。そこで，本章では，まず，各章におけるポルトマンの諸主張を抽出した上で，それらに共通する思想を検証していくという順序立てをとることにする。それによって，前章で見たような，保育原理テキストにおけるポルトマン解釈の偏りを明らかにすることができるだろう。

まず，再確認しておくべきなのは，ポルトマンの問題関心の所在である。彼の関心は，動物と比較することによって明らかになる，人間の独自性・特殊性，すなわち「人間性」を探究することにあった。彼は，「動物の行動研究から人間存在の評価の基礎がさがしだせると信ずることは，宿命的なまちがい」だと述べる（ポルトマン［1961：23］）。つまり，彼にとっては，動物研究によって，人間性を明らか

にする試みは，明らかに失敗するものなのだ。ポルトマンは，人間性の探究を，人間に焦点を当てることで行なおうとする。人間性は，人間を対象にすることによってのみ明らかにされうるのである。

以上のような前提に立って，彼は哺乳類･鳥類が，「巣」に対して見せる振る舞いによって，分類しようと試みる。それは，「離巣性」と「就巣性」の２類型である。

ポルトマンによれば，生後間もない霊長類は，「巣立つもの」，つまり離巣性をもつという。それらは「みな開いた眼と，よく発達した感覚器官をもって生まれ落ち，そして誕生第一日からさまざまな運動をする能力がある」（ポルトマン［1961：31］）。というのも，人間と類人猿は，共に体内で就巣性の段階を経過しているために，誕生時には，「その発達ははるかにすすんだ段階に到達している」からだ（ポルトマン［1961：39］）。しかし，人間の新生児は，「このようにながい発達の段階を通りながら，［…］不思議にもおそろしく未成熟で能なし」である。この「矛盾」が，「人間の形成過程」が「特別なもの」であることを示唆するという。ここで重要なのは，人間の未成熟さは，「就巣性」を持つ動物の未成熟さとは，全く別のものだとポルトマンが指摘していることである。人間の新生児は，「「巣に坐っているもの」の身体の未成熟さのために能なしなのではなく，哺乳類のうちでまったく独特な例外的な状態，まさしく人間の状態のために能無しなのだ」（ポルトマン［1961：41ff.］）。

ここで，ポルトマンのいう人間特有の「未成熟」が，動物と比較したときのみに見いだされる特徴と見なしていたと考えるべきではない。本章冒頭に述べたように，ポルトマンにとって，動物との比較は，あくまで，人間の特性を明らかにするための作業であり，そこに第一の主眼が置かれているわけではないことに注意すべきである。

さて，ポルトマンは，人間の新生児の特徴を，人間に即して明らかにするために，新生児の身体的特徴を，他の動物種と比較しようと試みる。彼によれば，人間の新生児の「身体の割合」，つまりプロポーションは，「成育したおとなの姿の割合」とは著しく違っているという（ポルトマン［1961：45］）。一方のサルの新生児が「成育したおとなの姿の縮図，つまり模写像」の姿を持つのに対して，人間は，「ある遺伝的要因によって，［…］サルのように早くその種に応じたおとなの身体の割合に到達することをさまたげられていて，あらゆるサルの関係からまったくはずれた成長のしかたをして，特別な中間段階を経たあとで，誕生後になってやっとおとなの身体の割合に到達する」（ポルトマン［1961：47］）。

さらに，「生まれたばかりの人間の赤ん坊は，どんな大きなサルの子どもよりもはるかに重い」（ポルトマン［1961：50］）という事実にも，ポルトマンは注意を促す。この，サルの新生児と比較したときの人間の新生児の圧倒的な重さという事実は，「成育したおとなの類人猿がもつ大きさを，誕生時にすでにうわまわる人間の脳髄に，身体のほうが同調していること」と意味すると考えられる。「人間の新生児では脳髄の大きさが身体の大きさに対する割合は，ほぼサルと同じ関係にある」（ポルトマン［1961：57］）。人間の新生児の脳と身体の割合は，サルの成体の脳と身体の割合と同等だというのである。つまり，ここで明らかになることは，ポルトマンの主張の力点は，人間がサルと比較して「未熟」であり「発達が遅れている」ということにあるのではないということである。人間は，サルのおとなと同じ頭脳を，すでに胎児期にもっているということ，そのことを強調しているのである。

そうであれば，ポルトマンを，「人間が，動物と比べて未熟な状態で生まれてくる」という，「誕生時における動物からの後退」を唱えた人物として把握することはきわめて一面的な評価だと言うことが理解されてくるだろう。

ポルトマンにとって，人間は，動物と比較して「未熟」であるのではない。自らの大脳の過度な発達が，身体と釣り合わないことを言っているのである。そのことを，動物との比較によって，一層際立たせているに過ぎないのである。

確かに，ポルトマンは，人間の新生児の「未熟さ」について，再三にわたって語っている。しかし，何が未熟なのか，が重要である。ポルトマンは，「生まれたての人間は，その姿や行動の点では霊長類のどの種類よりもなんと未熟なのだろう」（ポルトマン［1961：58］）と慨嘆するが，ここからも

明らかなように，未熟なのは，「姿」と「行動」なのであり，内部器官ではないことは明らかである。

さて，ここで焦点となるのは，「人間独特の未熟さ」は，何と比較した場合の未熟さなのか，という点である。ポルトマンの論旨を追ってみよう。まず，彼は「人間は生後一歳になって，真の哺乳類が生まれた時に実現している発育状態に，やっとたどりつく」（ポルトマン［1961：61］）と述べる。そして，ここでの「発育状態」とは，「体の割合はおとなに似ていて，その種特有な直立姿勢をとり，そのうえ少なくともわれわれのコミュニケーションの手段としての最初の要素，つまり言語（と身振り語）をそなえている」状態のことである（ポルトマン［1961：61］）。つまり，類人猿が誕生時に備える基本的な機能を獲得する時点が，人間の場合，誕生後「一ヵ年」であるために，これを称して「生理的早産」というのである。この時期を，ポルトマンは「子宮外の幼少期」と名づけた。

ポルトマンによれば，発育期間の長さは，神経系統の高度な組織化の度合いに比例するものである。そして，神経系が成熟するまでの「自活できない延長された期間」を，高等哺乳類の子どもは，「胎生期間がひどくながくなることで解決されている」。しかし，人間では，その期間は，「下等な動物で見られるのと同じ方法」，つまり，「高等な鳥類」と同じように，「両親による力強い養護と注意」のもとに，「一種独特な両親への依存性」をもって過ごされる。この「両親への依存性」が，ポルトマンの見るところ，「哺乳類のなかでただ人間だけ」の特徴，すなわち「人間性」なのである（ポルトマン［1961：72］）。そして，このような特徴は，遺伝的に決定された連鎖的プロセスによって現れるものとされる。「胎生期発達に作用するさまざまな要因は，成育した動物のさまざまな機能を支配する要因と同じように，ひとつながりの関係のなかの一環である。これは，ただ一つの構造のなかの一部分，鎖の一つの環にすぎないので，これらすべては，一つの遺伝的にきめられた生物体の構造計画案にくみこまれているのである」（ポルトマン［1961：75］）。

以上が，ポルトマンの「生理的早産説」の全貌である。このように見てくれば，「生理的早産」という言葉の語感のままに，それを「他の動物と比較した場合の人間の未熟性」と見なしてきた保育原理における記述の不適切さが明らかになってくるであろう。ポルトマンにとっての人間の新生児の「未熟性」とは，「他の動物の身体と比較したときの，絶対的な身体の未熟性」なのではなく，「人間の脳の極端な発達度と比較したときの，相対的な身体の未熟性」のことなのである。ポルトマンの関心は，あくまで人間の脳と，それが生み出す創造的な精神的作用に向けられていたのであり，身体的特徴は，それを条件付けている「環境」の一つにすぎない。

保育原理テキストに見られたような「人間の発達段階は，他の動物と比較して未熟であり，後退している」というテーゼは，ポルトマンの生理的早産説よりも，むしろ，ルイス・ボルクの胎児化仮説の主張により近い。ネオテニー（幼形成熟；neoteny）とは，一般的には，発生の遅延現象として理解されているが，人類進化史の領域において，このネオテニー概念を本格的に導入したのはボルクである（モンターギュ［1986：292ff.］）。彼の胎児化仮説によれば，「現生のヒトは身体的には性的に成熟したサルの胎児である」とされる。ボルクは「人類の進化的な形成を，前人類の胎児の形質が成体にまで保持されること，つまり成長の遅延によると考えた」のである（西脇［1991：104f.］）。アシュレイ・モンターギュが述べるように，ボルクのネオテニー仮説は，「ヒトに特有な形質の発達は，内分泌器官の活動が遅延または抑制された結果生じたもの」であるという認識から出発するものである（モンターギュ［1986：292］）。そしての「抑制」の結果，「ヒト個体の発達速度が他の霊長類と比べて遅延している」と結論づけた。

以上のように，ボルクの胎児化仮説は，人間の幼児が，サルの幼児より成長段階において後退，すなわち「胎児化」しているという主張をもっており，明らかに人間性を，動物からの欠如態として記述しているといえる[3)]。ただ，ボルクは，必ずしも人間の新生児の相対的「遅延」のみを論じていたのではない。「身体の全体に対する部分の相対的な成長の結果」によっても，そのようなアンバランスは生起しうるとボルクは考えていたからである（西脇［1991：105］）。

しかし，ここで注意すべきことは，ポルトマン

は，まさに，このようなボルクの仮説に対して，厳しい批判を加えているということである。ポルトマンは，「胎児化理論が今日多くの生物学者によって，人間に関する限り，系統発生理論，つまり進化論のあたらしい，そして妥当な形のものだとみなされている」（ポルトマン［1961：48］）と述べ，それが定説の座を手に入れていると言う。だが，ポルトマンの見るところでは，ボルクの仮説は「人間の姿の本質的な特徴は，胎児の身体の割合をたもっていく点にあることを証明しようとする」ものである（ポルトマン［1961：48］）。彼によれば，ボルクのこのような説は，人間を動物的存在の延長として捉えるものであり，それゆえに，人間の独自性を明らかにしえないのである。

このような，ポルトマンの胎児化仮説に対する批判を正当に評価するならば，保育原理テキストにおいて「早産」という術語が，意図的に曲解されているという側面があることは否めない。上述のように，その「早産」という術語の強調点は，人間が動物と比較して「未熟である」という点にあるのではなく，むしろ，その身体的な発育とつき合わせて見たときの大脳の発達の極端な進行を主張することにあったのである[4)]。つまり，「生理的早産」という術語の，ポルトマンにおける含意は，「動物と比較したときの人間の未熟性」というよりもむしろ，「大脳＝知能の発達と比較したときの身体の発達の遅滞」に関するものであったということができる。

ポルトマンが，動物と人間を比較するという視点を取り入れているのは，実は，人間性の条件を，本能からの「自由」として位置づけているくだりにおいてである。

さて，ポルトマンは次なる章「人間の存在様式」で，人間性の更なる探究へと歩み行っていく。まず，ポルトマンは，人間の条件を，「本能から自由であること」と述べ，これを「決断」と呼ぶ（ポルトマン［1961：84］）。ポルトマンの見るところ，人間は，この決断可能性，すなわち「決断の自由」によって，「世界に開かれた」（ポルトマン［1961：91］）存在となっている。それに対して，動物の行動は，環境に拘束され，本能によって保証されている（ポルトマン［1961：95］）。

ここで注意すべきなのは，ポルトマンが，人間は「未熟さ」ゆえに「世界に開かれている」とは言っていないということである。世界への開かれを保証するのは，彼の語法では「補足」である（ポルトマン［1961：94］）。人間が，「自分自身を表象によって補足された一つの対象としてとらえ，それを第三者として自分と対置することができること」，これは，人間の存在様式を動物から区別する重要な相違点なのである。「われわれ人間の，世界に開かれた行動の特殊性は，「表象すること」ということばでいいあらわせる能力のことである。つまり，心のなかに姿をえがきだせるということである」（ポルトマン［1961：93］）。そして，その世界への開かれに触れうるのは，基本的には歴史学，人文学であって，生物学はそれを把握する枠組みを持ちえていない。これがポルトマンが見出したところの，生物学的人間論の抱える方法論的なジレンマである。

「哺乳類の基準からとんでもなくはずれている人間の個体発生」は，「世界に開かれた存在という事実に対応しており，われわれ人間の社会という世界は，遺伝的に与えられているのではなく，遺伝された素質と現実との接触から，すべてのひとびとのなかにもう一度あたらしくつくりだされなくてはならないという事情に対応する」（ポルトマン［1961：118］）。つまり，環境を「補足」し，それに服従することなく作り変えるゆえに，自由な存在，それがポルトマンにとっての「人間」なのである。

> われわれ人間の心理的な素質は，動物にみられるようななんの個性もない行動のしかたに自己分化して完成されるのではなく，周囲のゆたかな環境と接触することではじめてそれぞれ特徴的な，そして時代に規定された形に展開される。この発達の特殊性は，人間がその姿からいっても，心理からいっても，たしかにたいへん発達した状態で生まれながら，その種に典型的な行動様式に成育するはるか以前の状態にとどまっていて，そのおとなの姿に発達するためには周囲と接触する可能性を，ゆたかな体験と社会経験をする可能性をのこしておくということで確保されている（ポルトマン［1961：118f.］）

そして，このような環境の多様さを「補足」する

人間は，それによって，「歴史性」を獲得する。すなわち，ポルトマンにおける人間性とは，「一回起性」（ポルトマン［1961：115］）あるいは「歴史的」な出来事を経験することである。つまり，それは，彼自身によって「個性」と言い換えられるし，そして「自由」とも呼び直されるものである。

第３章　ポルトマンの原典読解によって明らかとなる保育原理テキストの誤謬

以上で検討してきたように，今までの保育原理テキストは，ポルトマンをボルク的に誤読してきたのである。そこでは，人間の新生児を欠如態として描き，「未熟＝無力」な存在として，徹底的に受動的な存在と見なす。それは，新生児に対する周囲の成人の働きかけ＝介入を，「発達の可能性」の名の下で正当化するというイデオロギーとして機能する。

このような記述においては，人間の新生児は「欠如」を抱えている存在であるゆえに外部への依存は絶対的であり，この依存ゆえに発達の可能性があるとされる。それゆえ，成人の新生児に対する作用は，その可能性を保障し展開させていくものとして「必要」なものとされる。そして，その働きかけは，「文化の伝達・継承」の名の下に正当化されるのである。このように，乳児を徹底した受動性の相に置き，それに対する保育的営みの能動性を補完的なものとして描くことに，既存のポルトマン解釈は援用されてきたのである。

生得的な「欠如」を可能性として捉え返すという恣意的な反転，そこには，新生児を「タブラ・ラサ」と見なす，経験論的ドグマも垣間見られる。そこでは，「過剰」は外部＝環境にある，とされてきた。しかし，そのような「生理的早産＝欠如」説では，「欠如」が動物性の欠如と捉えられている以上，人間性検討の準拠軸はどこまでも動物に置かれてしまい，そこからの「距離」としてしか，人間存在の特殊性を記述できなくなってしまう。既存の保育原理テキストの記述は，保育という営みの文化性，あるいはその文化性から生み出されてくる可能性の大きさを強調したいが余り，ポルトマンの「生理的早産」という言葉を，「動物と比較したときの人間の未熟性」として一面的に解釈し，その「未熟性」を，幼児の「発達可能性」として読み替え，さらにその可能性を，「保育の可能性」と横滑りさせて解釈するという構造があることが分かる[5)]。

幼児は「遅れている」のではない。彼の身体的な能力に照らしてみれば，あまりに認知能力が「発達しすぎている」のである。このような認識は，保育実践において，「赤ん坊に何かを与える」という統制的な側面を和らげるように働くだろう。本章の検討において示唆されているのは，赤ん坊の「過剰な発達性ゆえの身体とのアンバランス」という認識が生み出す，乳幼児の感受性に対して，相応しい配慮のあり方を再考していくことの必要性である。

ポルトマンは，幼児期発達における環境の重視を唱えたのであって，その環境とは，何をおいても第一に両親による養育であった。つまり，そこでは，保育や幼児教育は考慮に入れられていない。ポルトマンにとって，保育や幼児教育が，歴史上の文化的な営みの中で，人間成育の重要性を発揮し始めるのは，そのような環境的な養育が一定程度成功をみて以後のことなのである。未熟性は，あくまで両親が受けとめるべきものであり，それは軽々に保育者や教育者に代替されうると主張しているわけではない。ポルトマンは，人間の新生児の「能なし」が，「保育」の重要性を高めているとは主張していないのである。ポルトマン理論からの保育への示唆は，その「環境」概念を拡大し，再解釈して行くことによってのみ，実現されるはずである。そして，その「環境」は，子どもの多様性に十分応じうるものとして構想されなければならないだろう。

そのように考えるならば，既存の保育原理におけるポルトマン記述は，環境を保育とほぼ同義に扱ってしまったために，それをとりまく社会的な要因としての環境と，保育との関係を捉える視座，そして，保育という実践そのもののもつ環境としての性格を捉える視座の二つを失ってしまったのではないかと思われるのである。

さて，ここで，保育原理テキストにおけるポルトマン解釈の特徴を，３点まとめておこう。第一に，「子ども／大人」の非対称性が過度に強調され，子どもを徹底的な受動的存在とし，それを補完するものとしての大人の能動性を正当化している。第二に，人間性の根源は生得性には無いということを，

生得的な語彙で説明しているという捻じれを含んでいる。第三に，保育を，大人による能動的な働きかけ，言い換えれば，意図的な実践としての文化的営みと定義したために，意図的でない，生成的な保育の可能性を隠蔽してしまう。

このような３つの傾向を持つ，保育原理におけるポルトマン理解は，「生命」として新生児を捉える際の，その「生命」の枠組みを，著しく狭隘なものとしている。そこで想定されている「生命」とは，徹底的な無力であり，存在論的な受動性の相の下に捉えられている。ジョルジョ・アガンベンの類型を援用するなら，それは，「ゾーエーzoe」，「剥き出しの生命」に相当するものである（アガンベン［2000］）。生命として，生命の自存のみ汲々とするという，自存的かつ純粋な「生してのみの生」，「生物としての生」。

新生児に，生命における「ゾーエー」の相を恣意的に割り振って見せることによって，生命のもう一相，「生きる形式，生き方」であるところの「ビオスbios」の相は，能動性の下に正当化された「成人」へと回収されていくことになる。そこに生じるのは，「子ども／大人」，あるいは「乳幼児／保育者」の圧倒的な非対称性，および二項間のコミュニケーションの完全なる一方向性である。

さて，ここで問い直されなければならないのは，もし，われわれが，子どもの目線に立った，対称的な保育を目指すとしたならば，どのようにポルトマンを読み直せばよいのかということである。さらに，子どものもつ人間性を，生物学的な生得性，言いかえれば「生まれながらの宿命」と十把ひとからげに捉えるのではなく，子どものもつ多様性を，環境との相互作用をも視野に収めながら捉え直すにはどういう思考枠組みが必要なのかということも，問い直さなければならないだろう。そのような問い直しに真摯に取り組むことで初めて，「意識的働きかけ」に留まらない，「無意識の交感関係」までを視野に収める新しい保育原理のフォーマットが浮かび上がってくるにちがいない。

第４章　「人間性」記述のパラダイム・シフトへ：ハンナ・アレントの人間性論再考

さて，本章では，前章までにおいて明らかになった，ポルトマンの解釈の一面性を乗り越え，「新たなパラダイムへの転換」に相応しいかたちでポルトマンを読み直すことを目的としたい。

そのための手がかりとして，本章で検討の対象とするのは，政治哲学者のハンナ・アレントの人間性に関する議論である。周知のように，アレントが1958年に『人間の条件』で示したことは，生存上の諸問題から自由な市民が，卓越性を競って言論を戦わせる「現れの空間」こそが，公的＝政治的な領域であるという認識である（アレント［1994b］）。アレントは，このような「現れの空間」において，多様性の相の下に，「行為」することこそが，人間性の条件であるとした。この，「多様的な現れ」としての人間性の位置づけは，彼女のその後の著作のなかにも，様相を変えつつ繰り返し登場することになる。

彼女の未完の著作『精神の生活』冒頭においても，この人間性をめぐる「多様性」に関する考察は，人間をめぐる諸学の系譜を再検討する中において展開されている。アレントによれば，近代科学は，「単なる現象」の背後に，「真理そのもの」を果てしなく求め続けてきた。しかし，アレントに拠れば，「現象」は常に「現象」に連なってゆくもので，現象を真理の下位におく古典古代以来の形而上学的なヒエラルキー構造は，近代科学にも継承されているのだが，その「現象を超えた領域に到達することが出来ない」というアポリアもまた，近代科学にも孕まれているのである。つまり，「無限進歩」という概念によっても，「真理の究極の絶対目標に達した」とは到底思えないのである。

そして，この「困難」を，最も鋭く意識せざるをえないのが，「人間を直接扱う学問」，すなわち，生物学，社会学，心理学である。これらのディシプリンは，保育学が依拠してきた基本的なパラダイムを構成するものであることは言を俟たない。

アレントに拠れば，生物学，社会学，心理学は，「すべての現象を生命過程の機能として解釈する」（アレント［1994a：33］）。それらが採用する「機能主義」においては，現象は，もはや「従属的な性質」だとされて価値を貶められることはなく，むしろ，生命組織の本質的な内的過程に，必要な条件だと見

なされる。しかしながら，ここにおいても，「（真の）存在」と「（単なる）現象」という「古来の形而上学的対立」そのものは，不変のまま温存されていることを見のがしてはならない。

アレントの見るところ，このようなヒエラルキーに，近年，疑問が投げかけられるようになってきた。それは，「現象があるのは生命過程のためではなく，反対に，生命過程が現象のためにこそ存在するのではないだろうか」という問いである。言い換えれば，これは，「我々は現象する世界に生きているのだから，この我々の世界で意味あるものはまさしく表面にあるという方がもっともらしい」という考え方の現れである。

そして，このような立場に立つ論者として，彼女が挙げるのが，まさにポルトマンなのである。アレントによれば，ポルトマンは，動物の生活の「形態と形状」について考察している。「事実そのものの語るところによれば，生命体の諸現象は自己保存と種の保存という二つの目的のためにだけあるとする単純化された機能的仮説とは，ずいぶん違ったものである」。むしろ，反対に，「内面の現象しない器官」は，「現象を生み出し維持するためにのみ存在するかのように見える」のである（アレント［1994a：34］）。

ポルトマンによれば，動植物の生命のきわだった多様性の存在は，機能の多様性の表れだと説明することは困難である。つまり，生命の「多様性」は，機能からいったん切り離されて，別の枠組みを用いて説明されなければならない。これが意味するのは次のようなことである。これは，外面的な，感覚によって捉えられるものを，「本質的」，「中心的」，「実在的」な過程の「従属的な結果」だとする，前述のヒエラルキーに対する懐疑である。外面的な多様性は，内面的な「本質」としての機能によっては説明がつかない。

ただ，アレントの見るところでは，ポルトマンは，自分が提示した「形態学」の主題を，十分に汲み尽くし得ていない面も見られる。

ポルトマンの発見のポイントは，「外部に現象するものは絶望的なほどに内部とは異なっているので，そもそも内部が現象するとはいえないほどだ」ということであった（アレント［1994a：35］）。「外部」のもつ唯一の機能は，「内部を隠し，保護して，現象世界の光にさらされないようにすること」なのである。「もし内部が現象するということになれば，みんな同じように見えてしまうだろう」。

さらに，「保存本能」からは区別された「生得的衝動」として，「自己表示衝動」があるとポルトマンは指摘している（アレント［1994a：35］）。先ほど述べられたように，ポルトマンにおいては，外部現象は，内的過程の表れではない。外部は，内部の制約から自由なものなのであった。そのような外部現象の相対的な自律性は，活発な活動の多様性の前提条件なのである。感覚はもはや，「純粋の受容性」のみに留まりはしない。アレントによれば，「生きているもの」はすべて，「現象への衝動」を備えており，「「内的な自己」ではなく個体として自分自身を表示し提示することによって現象世界に合わせようとしているかのようである」（アレント［1994a：36］）。「現象は，自分自身以外の何も表現しない。すなわち，現象は展示し，表示する」。そうであるがゆえに，「我々が何で「ある」かということにとっては，我々の内部にあるもの，我々の「内面生活」の方が外側に現象するものよりも重要だという一般の信念は錯覚」である（アレント［1994a：37］）。

そして，この「自己表示」こそは，「動物の生命では高等な形態のなかですでに目につくことだが，その頂点に達するのはまさしく人類において」という衝動なのである。アレントにあっては，外部現象の内部過程に対する優位こそが，多様性の源泉であり，かつ，活動性の自由を担保するものとしての「人間の条件」に他ならない。

このように述べてくれば，このアレントの主張が，前章で見たポルトマンの多元的環境論と共鳴し合っていることに気づかれるはずだ。われわれが今，アレントを通してポルトマンを再読することは，人為の相としての「多様性」から，人間性の条件を再構築するという試みを導き出すことだろう。

むすびにかえて：「反自然主義的保育学」の方へ

以上のように，人間性の由来を，その生得性，すなわち「自然」に基礎づけるのではなく，「自然」

から相対的に自律した「人為」の相に求める試み，それは，「人為」の行為としての「現れ」に着目するまなざしを，われわれに要請することになる[6)]。そのような，人為としての現れは，アレントが述べるように，画一的な生命的欲求，いわばオイコスの領域から切り離されているゆえに，多様な展開を見せうるだろう。この「自然」から自律的な「人為」に着眼して，子どもに出会いなおそうとする試みは，保育学を自然主義的な枠組みから解放させる試みと言ってもよい。「人為」とは，ルソー的な「自然」を評価軸の原点に据え，そこからの絶対値の大小によって，文明装置，すわなち「人為」の価値付けを行うという「自然主義」への対抗軸として打ち出されたものだ。「子どもから成人へ，〈人体の自然的発展〉がもつ顕在性と自同性の傍らで，われわれ人間は，〈人体の自然〉が〈人間の非自然〉とどのように交差し，拮抗し，補完しあっているのかを見極めねばならない。そして最終的には，〈人体の自然〉ではなく，〈人間の非自然〉の方にこそ，統制的な審級が潜んでいるという事実を意識化しなければならない」（金森［2010：2］）。保育学は，〈人為の不自然〉を把捉しうる理論的装備を整えていかなければならない。

既存の保育原理テキストの多くは，「人為」としての保育の価値性を強調する余り，非本能性を本能性によって基礎付けるというジレンマに陥ってしまった。さらに，その「人為」としての保育は，「自然」を促進することにあるというのだから，その捻転は一層苛烈である。人間のレゾン・デートルである〈超－自然〉を，「自然」の語彙によって担保しようとするアポリアがここには伏在している。われわれは，このアポリアを解きほぐし，子どもと対称性の地平において出会いなおす思想を希求するべき時に至っているのではないだろうか。そのための第一歩が，「自然主義」から解き放たれた子ども観を構築することであるはずである。

註

1）本稿の骨子は，全国保育士養成協議会第50回研究大会（2011年９月，富山市）におけるポスター発表において，既に萌芽的な形で提出されている。

2）「子ども観」にまで説き進んだ数少ない保育学系の先行研究としては，例外的に，本田和子による一連の労作が存在する。例えば，本田和子『異文化としての子ども』筑摩書房，1992年などを参照。

3）前章で検討したテキストの中で，ボルクに触れたものは皆無であった。

4）たとえば，時実利彦は，ポルトマンに触れて以下のように述べている。「動物や人間の胎児や新生児を調べたスイスの動物学者ポルトマン（A. Portmann）は，「十月十日の月満ちて」生れてくるという赤ん坊の身体はいちおうできあがっているが，いちばん重要な脳は全く未熟な状態で生れてくるのだといい，結論していわく，「人間は生理的早産」であると」（時実［1970：28］）。このポルトマンについての引用は，生後直ぐの赤ん坊の脳の成長が，身体の他の部位と比較したとき，著しく早いという点に言及する文脈の中に置かれている。この時実の認識は、ポルトマンの真意に即するものだといえよう。

5）このように述べることで，筆者には，「保育の可能性」を懐疑したり，否定したりする意図は毛頭ない。そうではなく，「保育の可能性」を，そのような生得的，遺伝的であるという意味で，「先天的かつ生物学的な概念」に依拠させて語ることが，果たして，現在においてなお適切なのかどうかに関して，再考を促したいのである。つまり，筆者の論点は，ポルトマンの曲解を生んだような，人間性を動物との比較において，先天的・生物学的な語彙で記述することが，幼児の多様性を理解する上で，ひとつの障壁となってしまうのではないか，という問題提起をすることにある。

6）「自然」に対立する概念として「人為」を掲げるという語法は，金森修のそれに倣っている（金森［2010］）。

参考文献

1）アガンベン，2000,『人権の彼方に：政治哲学ノート』高桑和巳訳，以文社.

2）アガンベン，2003,『ホモ・サケル：主権権力と剥き出しの生』高桑和巳訳，以文社.

3）アレント，1994a,『精神の生活（上）：思考』佐藤和夫訳，岩波書店.
4）アレント，1994b,『人間の条件』志水速雄訳，筑摩書房.
5）稲井智義；吉田直哉，2013，保育空間のポリティクス：森重雄の主題によるミクロ権力論的視角，東京大学大学院教育学研究科紀要，（52）.
6）金森修，2010,〈人為〉の人間学，東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室紀要，（36）.
7）諏訪きぬ編著，2001,『現代保育学入門』フレーベル館.
8）千葉眞，1996,『アーレントと現代：自由の政治とその展望』岩波書店.
9）時実利彦，1970,『人間であること』岩波書店.
10）西脇与作，1991，ネオテニー：成長と進化，市川浩ほか編『現代哲学の冒険２：子ども』岩波書店.
11）林信二郎；岡崎友典，2004,『幼児の教育と保育：指導することと見守ること』放送大学教育振興会.
12）ポルトマン，1961,『人間はどこまで動物か：新しい人間像のために』高木正孝訳，岩波書店.
13）ポルトマン，1981,『生物学から人間学へ：ポルトマンの思索と回想』八杉竜一訳，思索社.
14）待井和江編，1991,『保育原理　第３版：現代の保育学４』ミネルヴァ書房.
15）待井和江編，2010,『保育原理　第７版：現代の保育学４』ミネルヴァ書房.
16）待井和江；泉千勢編著，1994,『新訂：保育原理』東京書籍.
17）待井和江；泉千勢編著，2005,『保育原理：幼児教育科・保育科・保育士養成課程用』東京書籍.
18）モンターギュ，1986,『ネオテニー：新しい人間進化論』尾本恵市ほか訳，どうぶつ社.
19）村上貞雄監修，1980,『幼児保育学辞典』明治図書出版.
20）村山貞雄；岡田正章編著，1984,『保育原理』学文社.